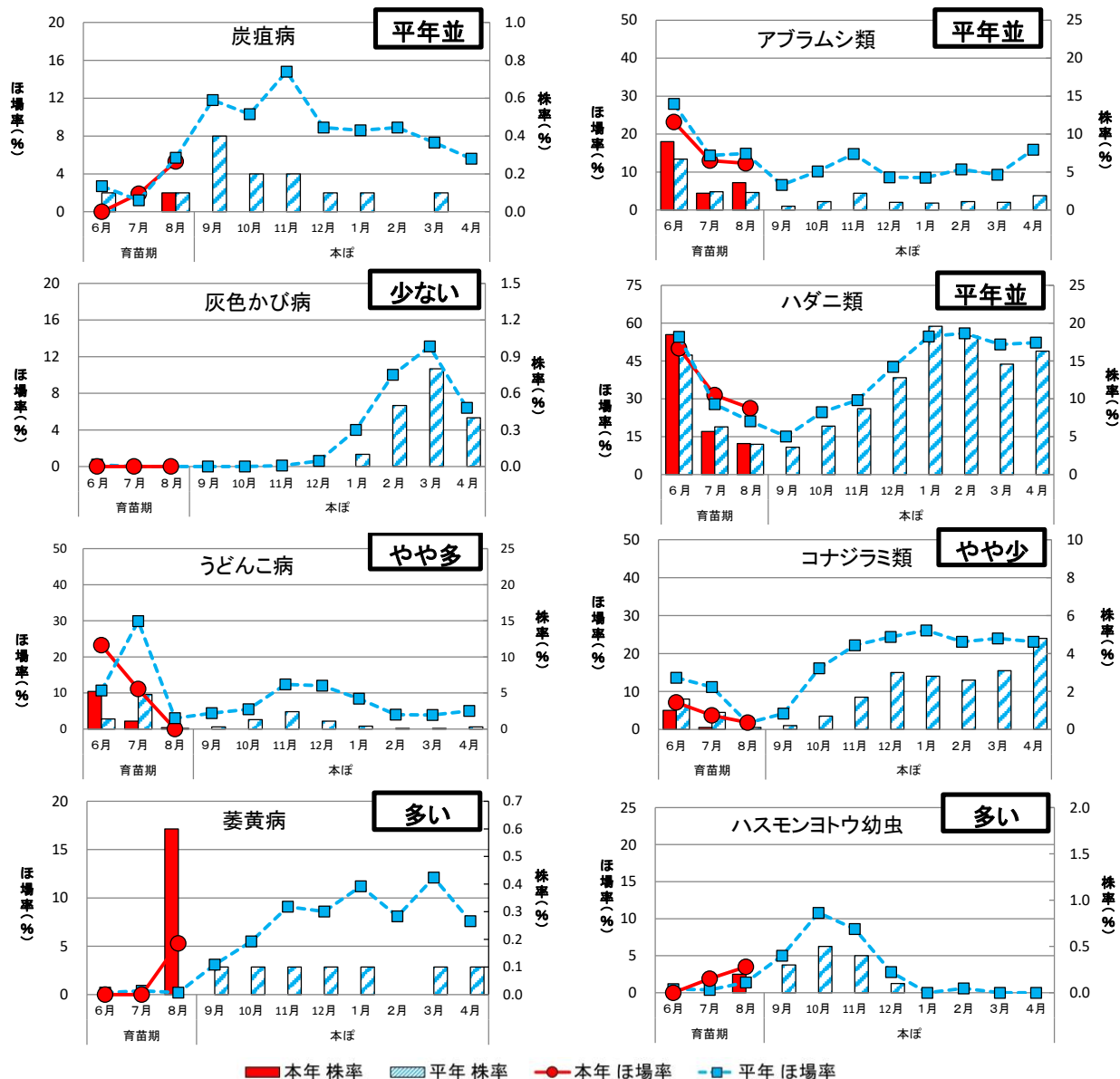


■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：57 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー 炭疽病・萎黄病（定植前の防除）ー

高温傾向が続いているため、高温性病害である炭疽病の防除に特段の注意をしましょう。
また、萎黄病の発生が多く認められたため、発生状況をよく確認し、罹病株は適切に処分しましょう。

- 炭疽病では、胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水のはね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。
- 炭疽病では、本ほへの罹病株の持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 炭疽病・萎黄病共に、発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。

■ 今月のトピックス ハスモンヨトウ

生態と被害について

ハスモンヨトウは、いちごの葉や果実を食害し被害を与えます。毛に覆われた卵塊（写真1）が葉裏に産み付けられ、孵化した幼虫は、若齢のうちは集団で葉を食害し（写真2）、不整形でカスリ状の食痕（写真3）をつくります。中・老齢（写真4）になると分散し隣接する株なども旺盛に食害します。昼間は地際や日陰にいることが多く、主に夜間に活動します。25℃のとき幼虫期間は14日程度で、土中での蛹を経て成虫になります。露地では越冬できませんが施設内では冬季も生存可能です。

防除対策について

- 1 ほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草を行う。
- 2 成虫の侵入を阻止するため、施設の開口部や出入り口に防虫ネット（目合4mm）を展張する。
- 3 ほ場内をこまめに観察し早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。施設のパイプにも産卵するので注意する。
- 4 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。



写真1 卵塊



写真2 若齢幼虫の集団



写真3 若齢幼虫による食痕



写真4 老齢幼虫

詳細は、農業総合研究センター防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、

[農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。

